

今週の為替相場見通し(2016年4月25日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		107.75 ~ 111.81	111.80	109.00 ~ 114.00
ユーロ	(ドル)		1.1218 ~ 1.1399	1.1223	1.1050 ~ 1.1350
(1ユーロ=)	(円)		121.71 ~ 125.50	125.50	123.50 ~ 128.00
英ポンド	(ドル)		1.4132 ~ 1.4453	1.4399	1.4300 ~ 1.4600
(1英ポンド=)	(円)	*	152.53 ~ 161.27	161.00	158.50 ~ 162.50
豪ドル	(ドル)		0.7594 ~ 0.7836	0.7715	0.7400 ~ 0.7900
(1豪ドル=)	(円)	*	82.09 ~ 86.39	86.17	81.00 ~ 88.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 山本 一暁

(1)今週の予想レンジ: 109.00 ~ 114.00 円

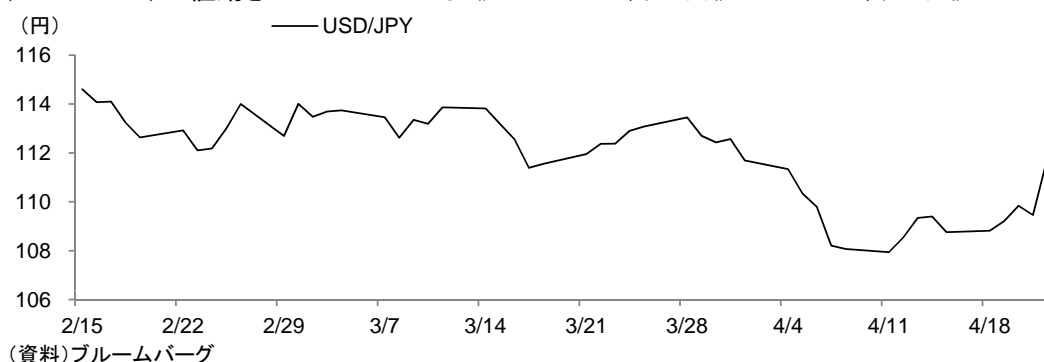
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、リスクセンチメントの改善ならびに追加緩和期待を背景に大幅上昇。17日に開かれた産油国間協議において増産凍結合意に至らなかったことから、週明け18日、原油先物相場がギャップダウンして始まると、ドル/円も早朝シドニー時間に一時、107.75円まで下落。G20会合後、ルー米財務長官より「(足許の円高は)秩序だった動きだ」とのコメントが出されたことが、本邦当局による介入可能性を制限するとの見方もあったが、翌週に日銀金融政策決定会合を控えては下値を模索する動きは限定的。108円台の底堅さを確認すると、原油先物相場が反発・上昇したことを受けてドル/円も前週クローズ水準の108円台後半まで反転した。米企業決算の概ね良好な結果に米株式相場が年初来高値を更新、リスクセンチメントの改善を背景にクロス円の買い戻しにもサポートされ、19日海外時間には109.49円まで上昇。翌日の東京時間ではやや緩む場面も見られたがクウェートのストライキの影響から原油先物相場が続伸、米10年債利回りが月初来のレジスタンスである1.80%を上抜けたことから日米金利差拡大が意識されドル円は109.88円まで再び上昇。心理的節目である110円手前では相応の売りが見られたものの、22日、「日銀が金融機関向けの貸し出しにマイナス金利適用を検討」との報道に日銀による追加緩和期待が強まりドル/円は110円ちょうどを上抜けショートカバーが強まると、111円の大台も突破し、111.80円と高値圏で越週した。

今週のドル/円は週後半に開催される日米両国の金融政策決定会合に向けて底堅い展開を予想。FOMC(28日(木)東京時間早朝3時に発表)では利上げこそ予想されてはいないものの、声明文中において足許の原油先物相場の上昇や中国はじめ新興国経済の落ち着きに言及、次回6月会合での利上げに含みを持たせる可能性が高いため、米債利回りは上昇、ドル円も上昇すると考える。一方、同日発表される日銀金融政策決定会合についてはエコノミストの約半数が何らかの追加緩和策が発表されると予想しているが、その内容についてはコンセンサスがない状態。先般導入されたマイナス金利の効果がいまひとつ明確でないなかでは一段の金利引き下げは難しいとの見方から、目新しい手法を用いてくることも予想される。したがって、本会合に向けた期待感が今週のドル/円相場の下支え要因となると考えるが、逆に期待感がやや先行しているだけに、それを上回る内容が発表されなければドル/円は戻り売り優勢となり反落するだろう。

(3)先週末までの相場の推移

先週(4/18~4/22)の値動き: 安値 107.75 円 高値 111.81 円 終値 111.80 円



2. ユーロ

為替営業第二チーム 坂本 真史

(1) 今週の予想レンジ: 1.1050 ~ 1.1350 123.50 ~ 128.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

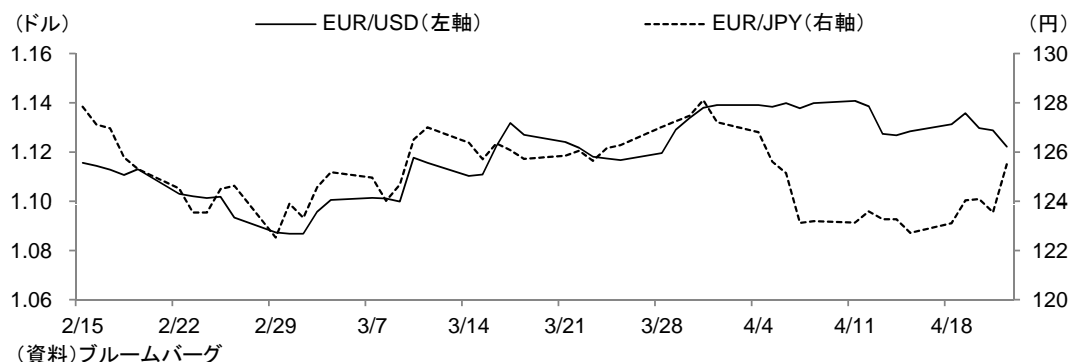
先週のユーロ相場は週後半にかけて対ドルで下落し、対円で上昇した。週初18日、ユーロ/ドルは1.13ちょうど近辺、ユーロ/円は122円台前半でオープン後、ユーロ/ドルは同水準で方向感なく推移。一方、ユーロ/円は産油国会合で原油増産凍結が合意できずリスク回避の動きから円買いが強まり、週安値121.71円まで下落した。翌19日、原油価格が下げ幅を縮小し、欧米株が持ち直すと、ユーロ/ドルは1.13台後半、ユーロ/円は124円台半ばまで上昇。週中20日は、独経済相がECBの政策の限界について言及し欧州金利が上昇したことにもサポートされ、ユーロ/ドルは1.13台後半で堅調に推移。ユーロ/円はドル/円が弱含んだことで小幅に下落し、124円ちょうどを挟んだ値動きとなった。翌21日、ポジション調整から1.13ちょうど近辺まで下落していたユーロ/ドルは、ECB理事会で政策金利が据え置きとなると、1.1399の週高値まで上昇。しかし、ドラギECB総裁から「長年に渡って金利は現行かそれよりも低いレベルになる可能性がある」とハト派な発言が出ると、ユーロは急落。ユーロ/ドルは1.12台後半、ユーロ/円も123円台半ばまで下押しされた。22日、ドル/円が大きく上昇し、ドル買い地合いとなったことや、発表された独4月PMIが予想を下回る結果となったことから、ユーロ/ドルは週安値1.1218まで下落し、1.12台前半で越週した。一方、ユーロ/円は、ドル/円の上昇に牽引されて週高値125.50円をつけ越週した。

今週は、27日(水)FOMC、28日(木)日銀金融政策決定会合と米1～3月期GDP(速報値)、29日(金)ユーロ圏1～3月期GDP(速報値)などとイベントが多数予定されている中、ユーロは対ドルで軟調に推移すると考える。一方で、対円では日銀の追加緩和実施によるドル/円上昇に連れて、ユーロ/円の上値を試す局面を想定しておきたい。まずFOMCでは、前回の3月会合で数名の参加者が「4月利上げは適切とは思えない」との認識であったことから、今会合で性急に利上げに踏み切るとは想定し難い。但し、金利先物市場で今会合の利上げが全く織り込まれていない環境下、利上げを見送ってもドルが大きく売られ、ユーロが上昇することはなさそうだ。次に日銀金融政策決定会合では、年初来の円高進行や熊本地震による実体経済の状況に鑑み、日銀が追加緩和を打ち出すことが想定される。その際、22日の相場のようにユーロ/円はドル/円の動きに牽引されて上値を試すものの、ユーロ/ドルはドル買いの流れから軟調に推移すると考える。先週、独政府高官から相次ぐECBの緩和政策への批判を受けてもドラギ総裁はハト派な姿勢を崩しておらず、ECBの緩和スタンスに変更がないことがユーロ/ドルの上値を押さえるだろう。ユーロ/円こそ、ドル/円の動きに牽引されて上昇することを想定しているが、高値圏では上昇速度が鈍くなると予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週 (4/18～4/22) の値動き:

	(対ドル) 安値 1.1218	高値 1.1399	終値 1.1223
(対円) 安値 121.71	高値 125.50	終値 125.50	



3. 英ポンド

欧州資金部 本多秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.4300 ~ 1.4600 158.50 ~ 162.50 円

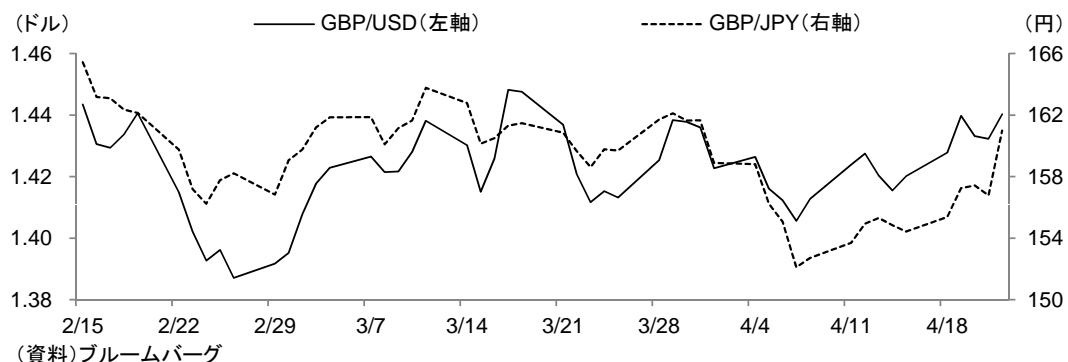
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは週前半に水準を切り上げて高止まり、対円、対ユーロではほぼ一貫した堅調推移を続けた。20日発表された英雇用統計は、12~2月平均賃金(含ボーナス)が、市場予想前年比+2.3%のところ発表は同+1.8%、3月失業保険申請件数も、予想-10.0千件のところ+6.7千件と低迷。翌21日の英3月小売売上高(含自動車燃料)も、市場予想前年比+4.4%のところ、発表は同+2.7%と予想を明確に下回ったが、いずれもポンドを押下げた様子はいかえなかった。ポンド高先行の背景は判然としなかったものの、円側の要因によるポンド/円の上昇がポンド全般の堅調をけん引した可能性や、原油価格上昇に連れた可能性などは考えられた。実際、週明け早々(18日)、ポンド下押しが先行し、その後反発したのは、少なからず原油価格動向に連れていた。原油価格が英物価に与える影響を受けた英中銀金融政策動向を巡る思惑(原油価格下落で利上げ時期が先送りになり、上昇で利上げ時期が前倒しになる)をポンドが材料視したと読むこともできたであろう。もっとも、原油価格動向は、円相場動向に影響を与えることでポンド/円の値動きにも影響していた。世界全般の景気動向を原油価格が反映していると考え、投資市場のリスク許容容のバロメータ(原油価格上昇がリスク許容量の高まりを、下落がリスク回避の動きを示す)として円相場に影響したと読んだ方が明快だったかもしれない。週引けに掛けては、独大手自動車会社の排ガスデータ改竄疑惑で独株が急落したことを受けてユーロが、それ以上に、日銀によるマイナス金利での資金供給が観測された(22日)ことで円が、それぞれ急落したことで、相対的にポンドは堅調な値動きを見せた。

今週の英ポンド相場は、堅調気味の横ばい推移を予想。通貨市場の関心は、27日(水)の米連銀公開市場委員会、28日(木)の日銀金融政策決定会合などに集まり、英固有の要因に対する関心は低い。EU残留の是非を問う英国民投票を巡っても、この間、オズボーン財務相による英経済損失の試算発表(18日)、英中銀カーニー総裁による英金融業への打撃に関する議会証言(20日)、オバマ米大統領による英政府の影響力低下に対する懸念発言(22日)など、EU離脱による悪影響に対する懸念が次々に表明されたが、それで世論が大きく傾いたとか、ポンドが買われたなどという様子はほとんど読み取れなかった。結局、6月23日の投票を経るまでは、EU離脱に対する懸念が払拭されることはなく、ポンド上値が重い状況は変わらないということではないか。テクニカルにも、ユーロ/ポンドが2~3月にもみ合った0.77~0.79やポンド/円が3月にもみ合った158.50~162.50円といった水準を、一気に(ポンド高方向に)突き抜けるような展開は想定しづらい。それでも、ポンド堅調を中心に見込むのは、原油価格の堅調推移持続を期待するから。このままの堅調推移が続けば、原油は、8月には前年比横ばい水準までへの回復が予想できる。仮定の上に仮定を重ねる議論だが、英国民投票が「残留」で片付いた時点で、英物価(総合指数)が同コア指数(3月前年比+1.5%)に接近している世界を想定した時、英中銀カーニー総裁がその金融政策に関して何と発言しているかは興味深い。他に、英経済指標では、26日(火)に英銀協の3月住宅ローン承認件数、28日(木)にネーションワイドの4月住宅価格、29日(金)に英中銀の住宅ローン承認件数などの住宅関連指標の発表があるが、市場の関心は高いとはいえない。27日(水)の英1~3月期GDP速報値の発表には注目が必要だが、余程市場の予想から乖離した数字でも出ない限り、ポンドに与える影響は限定的であろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/18~4/22)の値動き: (対ドル) 安値 1.4132 高値 1.4453 終値 1.4399
(対円) 安値 152.53 高値 161.27 終値 161.00



4. 豪ドル

為替営業第二チーム 下山 泰典

(1) 今週の予想レンジ: 0.7400 ~ 0.7900 81.00 ~ 88.00 円

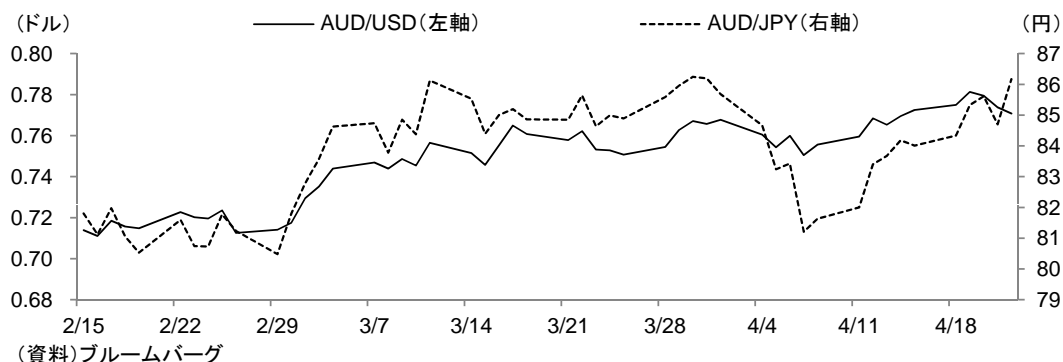
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、原油価格の上昇を受けて、一時上値を切り上げる展開となった。週初、対ドルでは0.76台後半、対円では82円台後半と前週末から下にギャップを開けてオープン。しばらくして対ドル/対円ともに週安値となる0.7594/82.09円まで下落した。週末にドーハで行われた産油国の会合が物別れに終わり、原油価格の下落が意識されたことが背景。しかし、クウェートでのストライキの報道等をきっかけに原油価格が底堅さを見せると対ドル・対円ともに上昇に転じた。19日は、豪州準備銀行(RBA)金融政策決定会合(4月5日開催分)の議事要旨公表やスティーブンスRBA総裁の講演があったものの目新しい材料はなく、豪ドルへの影響は限定的となった。しかし、原油価格が引き続き堅調に推移すると、豪ドルは対ドルでは0.78台前半、対円では85円台半ばまで値を上げた。20日も同様に原油価格や鉄鉱石価格が堅調に推移したことで豪ドルも底堅い推移となる。21日は、海外時間の鉄鉱石価格の上昇を背景に対ドルで週高値となる0.7836まで上昇する。しかし、その後は原油価格が大きく下落すると豪ドルも連れ安となり、22日にかけて0.77台前半まで下落。一方、同日には「日銀が金融機関への貸出金利にマイナス金利を適用することを検討」とのニュースヘッドラインを受けて円安が急速に進み、対円では84円台前半から週高値となる86.39円まで上昇した。結局対ドルでは水準をやや切り下げ0.7715、対円では86.17円で越週した。

今週の豪ドル相場は上値の重い展開を予想する。注目は、原油相場の動向及び27日(水)に発表される豪1~3月期消費者物価指数(CPI)。まず前者だが、原油価格は足許まで投機筋のポジション調整を背景に上昇してきた印象も、肝心のドーハ会議が物別れに終わっているところからは供給過剰の改善は見込みがたい。そのため、徐々に売り圧力に晒されることになると思われ、豪ドルの下押し圧力となるだろう。そして、豪1~3月期CPIは、前回からやや弱めの結果が市場で予想されている。先週発表されたRBA議事録でも「低インフレ・豪ドル高を踏まえると非常に緩和的な政策が適切」と謳われており、CPIが弱い結果となればさらなる追加利下げ観測も高まり、豪ドル安を招くだろう。一方、多少強かろうともRBAがハト派的なスタンスをすぐに変更するとも思えず、結局は豪ドルの上値を押さえる材料になりそうだ。また、27日(水)にはFOMC声明文も公表される。先月のFOMCで利上げの障壁として挙げられた新興国経済や原油安はいずれも改善しているとは言い難く、市場の利上げ織り込みもほぼ皆無であることを考えれば、市場との対話を重視するFEDが利上げを強行することはないだろう。利上げに向けたトーンもほぼ不変となると思われ、影響は限定的か。仮に、最近の原油価格の回復等を受けてややタカ派的なトーンとなっていようと、同日のアジア時間に発表となる豪1~3月期CPIを受けた豪ドル売り地合いの中で戻り売りの好機を与えるものとなるだろう。原油の需給動向に本質的な変化を与えるような報道や、豪1~3月期CPIが予想を大きく上回るような結果となれば豪ドルが大きく上昇することもあるが、基本的には上値の重い展開を予想している。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/18~4/22)の値動き: (対ドル) 安値 0.7594 高値 0.7836 終値 0.7715
(対円) 安値 82.09 高値 86.39 終値 86.17



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。